

令和2年度

研修集録

第32号

秋田県立新屋高等学校

巻頭言

秋田県立新屋高等学校 校長 根 義鎮

今年度は研修等が多い年であった。4名の教諭が「中堅教諭等資質向上研修」の対象者であり、1年間をかけて自身の資質向上のため研究授業を始めとして各種研修を実施した。その中で、選択研修として異業種での研修があるが、教師は学校という閉鎖され気味の空間で過ごしているため、社会の情勢について疎い面を持っている場合が多い。また、日頃は生徒を相手にしているため、対等以上の人との会話を不得意としている場合も多い。今回の研修で、学校と社会のギャップを感じ、社会人としてのルールやマナーを学んでくれたことであろう。このことを今後の教員生活に大いに生かしてもらいた。

また、昨年度より探究活動実践モデル校として「カリキュラム・マネジメントに関する実践研究」の指定を受け、『「探究力」を育てる授業の工夫』という研究テーマのもと「対話」ではぐくむ5つの力ということで、〔知力・学力、課題発見力、課題解決力、受信力・発進力、自己実現力〕をキーワードに、本時の授業では主に何を身につけるのかを提示して授業展開をしてきた。今年度はその総括の年として公開授業研究会を12月に実施した。そこにおいては、研究主題として、『「探究」で伸ばす資質・能力』と題し日本史、生物基礎、保健体育の授業を公開した。そして、授業で培った探究の力を生かし、「総合的な探究の時間」では、グループを組み、それぞれが探究のテーマを設定し、最終的にはプレゼンテーション形式での発表を行った。これは、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しを持って粘り強く取組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる」という「主体的学び」にも合致しており、社会に出て必要とされる能力の一つとして少なからず育成されたと考えている。探究活動を進めていく上で、あることに対して興味関心を持ってそれが単なる興味から「問い」へと向かい、それをより深く掘り下げていく知識へと向かうことが大切であるが、今回の取組でその力が大きく付いたかと言われれば疑問ではあるが、今後への糸口となったことは確かである。今後の教育で更にその力を伸ばしていければと考える。

来年度よりGIGAスクール構想として、Society 5.0時代を生きる子供たちにとって、教育におけるICTを基盤とした先端技術等の効果的な活用が求められるが、現在の学校ICT環境の整備は遅れている。令和時代のスタンダードな学校像として、全国一律のICT環境整備がされ、1人1台端末及び高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備するとともに、並行してクラウド活用推進、ICT機器の整備調達体制の構築、利活用優良事例の普及、利活用のPDCAサイクル徹底等を進めることで、多様な子供たちを誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学びを全国の学校現場で持続的に実現させることになる。今後の研修の中心はこうして整備されたICT機器を活用しての事例研究や研究授業がなされることであろう。

目次

巻頭言	校長	根 義鎮	… 1
I 高等学校中堅教諭等資質向上研修			
	地歴公民科	神居 正暢	… 3
	英語科	澁谷 善洋	… 4
	芸術科	菅原真紀子	… 5
	養護教諭	豊嶋亜紀子	… 7
II 授業改善推進プロジェクト			
・前期校内研究授業			… 9
・後期校内研修			… 13
III 探究活動実践モデル校公開授業研究会			
・実施要項			… 15
・研究授業指導案	地歴公民科	神居 正暢	… 16
	生物基礎	阿部 大輔	… 18
	保健体育科	小森 美希	… 20
・協議記録	第1分科会		… 22
	第2分科会		… 24
	第3分科会		… 27
	全体会		… 30
・資料：これまでの活動記録			… 32

I 令和2年度中堅教諭等資質向上研修

特定課題研究レポート

所属校	新屋高等学校	職・氏名	教諭 神居正暢
研究分野	A：本県の教育課題に対する研究 B：マネジメントに関する研究 C：生徒指導に関する研究 D：教科指導に関する研究 E：道徳教育に関する研究 F：特別活動に関する研究 G：総合的な学習の時間に係る研究 H：特別支援教育に関する研究 I：その他		
研究テーマ	総合的な探究の時間の運営について		
<p>1 研究の概要</p> <p>本校は、令和元年度にカリキュラム型総合的な探究の時間モデル校の指定を受け、「地域の未来を創造する新屋高校プロジェクト（以下、ADP）」を策定し、地域社会の中核をになう若者・高校生へ育成を図ることを目標とし、3年間の取り組みを1年次「地域を知る」、2年次「地域で活動」、3年次「地域に貢献」とし各学年における課題を設定している。現2年生は探究対象学年として昨年度、「地域」と「生徒の興味・関心」を結びつけ、テーマの設定・仮説・調査・まとめを行った。</p> <p>発表内容から、「批判的な思考」や「創造的な思考」を本校生徒が苦手とすることが明らかになり、今年度は、調べ学習で終わらず、「新しい価値を創造する」や「複数の根拠から客観的な事実を導き出す」ことを生徒に呼びかけ、次年度にむけて「自分たちが地域に何ができるのか」ということを考察させた。また、昨年度は生徒の興味・関心から地域の実態に目を向けさせたため、独創性が強くテーマ設定において課題として適正を欠くものもあったため、年度初めにSDGsについて学習を行い、現実的な課題に向き合い、それを生徒が自分事としてとらえ積極的にその解決について考察するよう指導した。</p> <p>2 成果と課題</p> <p>〈成果〉</p> <p>地歴科教員（専門日本史）ということもあり、「社会全般」をテーマとする5班を担当した。「男女の平等」をテーマとした班は、「男女の雇用の格差」を出発点に秋田を代表する大曲の花火から花火職人にクローズアップしその実態について関係機関や企業に取材した。調査前に花火職人＝男性というイメージを持っていたが、調査によって女性の花火職人が2～4割程度広く存在することがわかり、新たな知見を得たことで、テーマについてさらに課題意識を持つことができた。また、「食品ロス」をテーマとした班は、インターネット上で本県のデータがないことを疑問視し、現状把握のため秋田市役所に取材をおこなった。この取材を通して、廃棄した食品の集計の対象が国と地方自治体で異なるため、統一的なデータが存在しないことが明らかになり、昨今社会問題になっているにも関わらず、取り組みが進んでいない現状について理解を深めた。また、家庭から出されたゴミ袋から食品ゴミを取り出す作業を担当職員が手作業で一つつ行っていることに課題意識が向かい、その改善方法について考察するなどテーマのステップアップも見られた。</p> <p>以上の2班以外も昨年度に比べ、探究活動において生徒の変容が見られた。</p> <p>〈課題〉</p> <p>2年間の学習活動をとおして次の事が課題としてあげられる。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① ICT機器の活用環境と情報収集 ② 話題やトレンドに引きずられやすい生徒の傾向 ③ グループ学習のあり方 ④ 探究活動と進路実現の接続 ⑤ 活動の価値を高める ⑥ ゲストティーチャー等外部の有識者の協力 <p>①は、調査を進める上で必要不可欠であり次年度に生徒に一人一台タブレット端末が配布されるのでインターネットへのアクセスは容易になる。しかし、②の問題もありインターネット情報を素直に受け入れてしまい、それ以上、思考を巡らせず調べ学習で終わってしまう生徒も多い。インターネット、書籍、取材など様々な手法を駆使して情報収集し、それらを元に自分で新たな情報を発信できる生徒に成長させたい。</p> <p>③は、学習活動において、意欲的あるいは主導的に活動できる生徒がいる一方、そうでない生徒もいることである。後者については、消極性などの気質によるものもあれば、グループで決めたテーマと、自分が調査したいテーマとの乖離によるものもある。また④において、大学進学者等は探究活動で学んだことを志望理由や、大学入学後の研究につなげるなど「高大連携」にも活かすことができることから、最終年度の「地域に貢献する」活動は、個人または集団の活動とするのが望ましいと考える。</p> <p>⑤・⑥については、ADPの成果の発信につながる問題である。遠野高校（岩手）では、指導に関わった大学教授がパネリストとして、市長もゲストとして参加して、市民会館で探究活動の発表会を毎年行っている。聴衆は在校生と一般市民で、マスコミの取材もある大仰なものだが、このような機会を得ることで、生徒が自信と達成感を持つとともに、学校と地域との連携も強まる。また、能代高校では、市役所の職員や地域の企業に活動の段階から参加してもらい定期的に意見交換をするなど積極的に地域の人材を活用しており、地域とともに課題に向き合うことも必要である。</p> <p>以上のような、課題をクリアして、ADPをブラッシュアップしていきたい。</p>			

特定課題研究レポート

所 属 校	新屋高校	職・氏名	教諭 澁谷 善洋																								
研 究 分 野	A:本県の教育課題に対する研究 B:マネジメントに関する研究 ③C:生徒指導に関する研究 D:教科指導に関する研究 E:道徳教育に関する研究 F:特別活動に関する研究 G:総合的な学習の時間に関する研究 H:特別支援教育に関する研究 I:その他																										
研 究 テ ー マ	生徒指導と部活動における指導との結びつき																										
<p>1 研究の概要</p> <p>本校は、学習面はもちろんだが、部活動にも力を入れている。部活動と学校生活は密接に繋がっていると語る教員は多いが、生徒がどのように変わったのかを計ることは難しい。これを生徒、教員の双方にとってわかりやすく、取り組みやすい形にすることはできないか思い、「秋田県教員育成指標「あきたキャリアアップシート」を本校の部活動用に改良したものをを用いて、生徒の変化の数値化と可視化を目指した。</p> <p><対象> 女子バスケットボール部15名（2年生5名、1年生10名）</p> <p><方法> 6月、11月、1月の主要な大会後に自己評価と感想、考察を記入。21個の項目のポイントの総計を用いてデータの分析を行った。（※項目については裏面に記載）</p> <p>2 成果と課題</p> <p><成果></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th></th> <th>(中間) - (年度当初)</th> <th>(年度末) - (中間)</th> <th>(年度末) - (年度当初)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>5.6</td> <td>4.4</td> <td>10</td> </tr> <tr> <td>2年</td> <td>8</td> <td>1</td> <td>9</td> </tr> <tr> <td>1年</td> <td>4.4</td> <td>6.1</td> <td>10.5</td> </tr> <tr> <td>レギュラー</td> <td>4.8</td> <td>2.4</td> <td>7.2</td> </tr> <tr> <td>見学(ケガ)</td> <td>0</td> <td>8.5</td> <td>8.5</td> </tr> </tbody> </table> <p>年度当初から年度末にかけて全体平均で10.0ポイントの伸びがあった。1年間で、ポイントの総計が下がった生徒はいない。以下に示すように自らの行動を数値化、可視化することで成長の実感があったようだ。</p> <p>◎生徒の感想より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏にはジグザグだった実践的能力が割と平行になった。今まで、考えても行動に移しきれなかった部分を少し修復できたのかもしれない。（2年） ・グラフを見て実践的能力が低いことに気づきました。<中略>もっと自分の立場を考えて周りを見ながら行動したいです。（2年） ・チームを改善しようとする自分と自分で考える力もついて、その項目の評価も上がると思うので、しっかり取り組んでいきたいです。（2年） (原文まま) <p><課題></p> <p>学年別、レギュラーのみ、見学の生徒のデータを見るとポイントの伸びにバラつきが見える。自分に厳しくという傾向は好ましい物ではあるかも知れないが、自己肯定感を養うことも必要である。評価の際に基準や例を伝えることや、学年や役割別に基準を示すことで自己肯定感アップに繋がるかもしれない。評価させることで成長を実感してもらえるようなシステムの構築が必要だと感じた。</p>					(中間) - (年度当初)	(年度末) - (中間)	(年度末) - (年度当初)	全体	5.6	4.4	10	2年	8	1	9	1年	4.4	6.1	10.5	レギュラー	4.8	2.4	7.2	見学(ケガ)	0	8.5	8.5
	(中間) - (年度当初)	(年度末) - (中間)	(年度末) - (年度当初)																								
全体	5.6	4.4	10																								
2年	8	1	9																								
1年	4.4	6.1	10.5																								
レギュラー	4.8	2.4	7.2																								
見学(ケガ)	0	8.5	8.5																								

特定課題研究レポート

所 属 校	秋田県立新屋高等学校	職・氏名	教諭 菅原 真紀子
研 究 分 野	A:本県の教育課題に対する研究 B:マネジメントに関する研究 C:生徒指導に関する研究 ④:教科指導に関する研究 E:道徳教育に関する研究 F:特別活動に関する研究 G:総合的な学習の時間に関する研究 H:特別支援教育に関する研究 I:その他		
研 究 テ ー マ	秋田を美術の視点から見直す		
<p>1 研究の概要</p> <p>生徒は、秋田に住んでいても地元の誇るべき文化や歴史を知らないことがある。そこで、年間を通じ、さまざまな題材に秋田と関連する要素を盛り込むことにより、生徒たちの中に故郷への愛着や誇りを醸成したいと考えた。また、秋田県には優れた美術品がいくつもあり、なかでも秋田蘭画はその歴史的背景も含めて価値の高いものだと思うが、昨年一年間、秋田県立近代美術館に勤務した経験から、秋田県民、なかでも若い世代の人にとってあまり知名度は高くないのではないかと感じていた。そこで、秋田蘭画への興味・関心を高めたいと考え、題材として取り上げることとした。今年度は、秋田市立千秋美術館「絵になる自然～生きとしいけるものへの賛歌～」展と、秋田県立近代美術館「秋田蘭画～郷を超え、花開いた絵画～」展で秋田蘭画が展示される予定だったので、生徒の鑑賞の機会にもなると考えていたが、新型コロナウイルスの影響でそれぞれの展覧会が内容や規模を縮小した結果、本研究も内容を若干変更した。</p> <p>＜実践＞</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 秋田らしさを表現したシンボルマークデザイン（1、2年生対象） ② 秋田蘭画に関する知識の調査（1、2年生対象） ③ 秋田蘭画に関するレポート作成（1、2年生対象） ④ 秋田杉を用いた彫刻（1年生対象） ⑤ 秋田県に関連したポスター制作（2年生対象） ⑥ 秋田産リンゴの彫刻（2年生対象） <p>2 成果と課題</p> <p>＜成果＞</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 自衛隊秋田地方協力本部シンボルマーク応募 優秀賞1名 本部長特別賞1名 ② 秋田蘭画に関する知識の調査結果（1、2年生の美術選択者対象） 秋田蘭画を知っている…36% 知らない…64% ・知っている内容 昔の絵画…26% 江戸時代の絵画…19% 洋風の絵画…19% 絵画のジャンルのひとつ…6% 遠近法を使っている…3% 小田野直武…3% その他（名前だけ知っている、秋田の絵画、貴重、有名、など）…30% 秋田蘭画を知っているという回答は予想より多かったが、遠近法や画家の名前など、学術的な知識を知っている割合は低かった。 ③ 秋田蘭画に関するレポート作成 （秋田蘭画の特徴、歴史的背景、気に入った作品などをまとめる。提出率68%） 規模は縮小したものの、千秋美術館では「自然美を謳う」、秋田県立近代美術館では「秋田蘭画-“出会い”の絵画」という展覧会が開催され、それぞれ所蔵する秋田蘭画を出品していたので、生徒に勧めたところ、レポート提出者のうち45%の生徒が展覧会で実物を鑑賞したうえでレポートに取り組んだ。また、ほとんどの生徒に秋田蘭画の歴史的価値や美しさを感じ取らせることができた。 			

- ④ 制作中
- ⑤ 制作中
- ⑥ 制作予定

<課題>

さまざまな題材へ秋田に関連する要素を盛り込むのは比較的容易だが、それを故郷への誇りや愛着に昇華するのは難しく、題材の進め方により一層工夫が必要だと感じた。また、振り返りなどで価値観や意識を共有する時間をもっと多くするべきだった。

秋田蘭画に関する知識の調査とレポート作成に関しては、次年度以降も取り組みを続け、質問事項の精査や、出題の仕方や実施時期を工夫し、より効果的な実践にしていきたい。

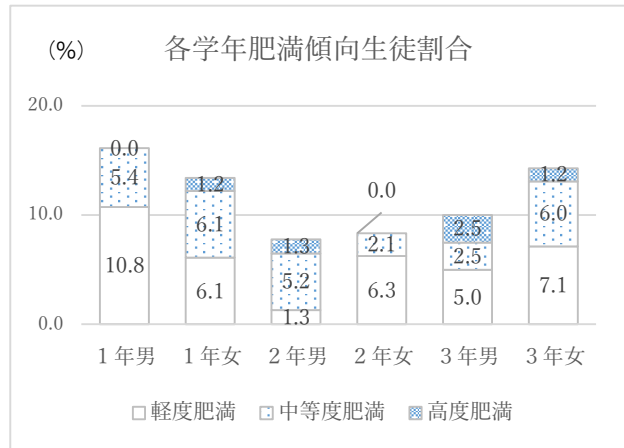
特 定 課 題 研 究 レ ポ ー ト

所 属 校	県立新屋高等学校	職・氏名	養護教諭 豊嶋 亜紀子
研 究 テ ー マ	本校における肥満傾向の改善に向けた取組		

1 研究の概要

本校生徒の栄養状態は、在籍512名（令和2年5月1日現在）に対し、右図の通りである。秋田県は令和元年度の学校保健統計調査において男女共に全ての年齢におちて全国平均を上回っており、本校も同様の結果である。

肥満は糖尿病や脂質異常・高血圧・心疾患などの生活習慣病をはじめとして数多くの疾患のもととなる。さらに若年で肥満となった場合は大人の肥満に移行しやすく、思春期の時期になると肥満をひきおこす生活習慣が定着してしまうことで元に戻すことが難しくなる。高校生は卒業後に保護者の管理下から離脱し、自らの意志で生活を組み立て、健康管理と維持を行っていく年代である。指導するチャンスの最後の年として下記の取組をもって生活習慣の見直しと改善を行うことで、肥満傾向の改善に取り組むこととした。



◇対 象 者：肥満度50%以上かつ、本研究の実施に承諾した生徒3名（女子2名、男子1名）

※女子1名は7月から参加。

◇実施期間：令和2年6月1日（金）～令和2年12月18日（金）

◇年間計画：別紙①参照

◇指導内容：別紙①参照

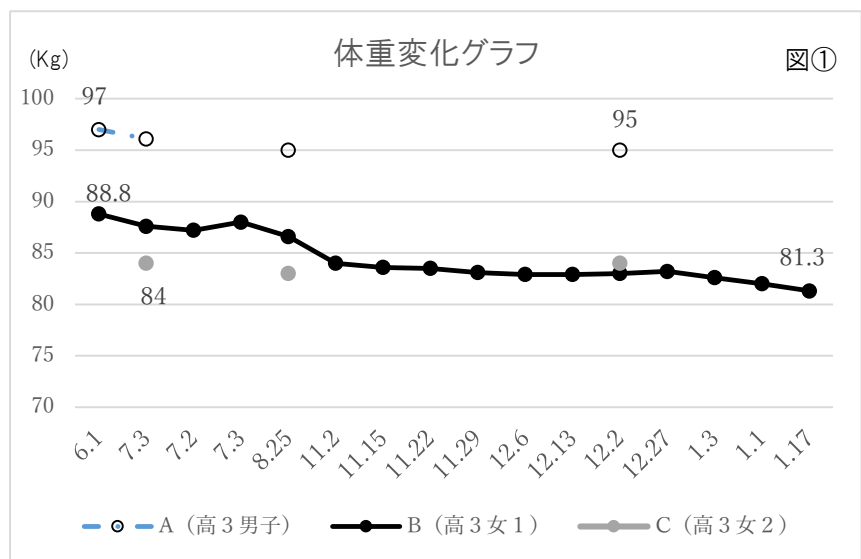
- ・年間計画を元に、万歩計を渡し運動量を自覚させること。食事の記録をつけること。週に1回保健室にて体重測定を取り組ませ、その結果と共に食事・運動内容について指導を行った。
- ・健康運動指導士による実技指導（電話、来校各1回）。

2 成果と課題

【成果】

◇体重の推移について

開始からA=2.0Kg減、B=7.5Kg減、C=2.0増 という結果を得られた。一番体重変化が大きかったBは面談と保健指導を最も多く実施した生徒であり、都合により来室できない時期でも、意欲的に生活習慣の改善等に取り組んでいた。AとCも変動の幅こそ小さいが、継続的に取り組んでいる様子がわかる。



◇運動量について

- ・万歩計のデータと自己申告の内容を運動量とした。
- ・当初は各自に万歩計を配付し歩数を記録させていたが、時間経過と共に各自にあった運動内容と運動量を自分で調整して行うようになった。
- ・健康運動指導士より、本生徒に合った、自宅で行えるような運動内容を実技を交えて具体的に指導していただいたことで、意欲の向上に繋がった。また、適切な運動量を専門家から示してもらうことで各自の運動量の目安に繋がった。

◇「健康指導振り返り表」について

「意識の変化」については3人共に見られた。実施期間終了後も継続して生活改善を行っている点から評価できると言える。「行動の変化」については変化が見られた生徒とそうではない生徒に分かれた。「心身の変化」については「体重が増えることに恐怖を感じるようになった」など決して良い反応ばかりとは言えなかった。

<まとめ>

全員に体重減少や生活習慣の改善などの明確な行動変容まで結びつけることはできなかったが、本研究をきっかけに意識変容を促すことができたと感じる。生徒からは実施期間終了後も食事内容の見直しや隙間時間を利用した運動を日々実施していると話があり、本研究の、肥満解消に向けた生活習慣の見直しと改善という目的達成のためのスタートを切ることができた。

3人とも3年生ということで、卒業後の生活設計は自身の意識によるところが大きくなってくる。本取組が卒業後の生徒の健康管理と維持の一助になってくれたのではないかと期待する。

【課題】

- ・運動量について生徒が継続しやすい状況を考えた結果万歩計の使用と本人の自己申告という形にしたが、客観性に乏しい結果となったため、運動内容や量について数値化するなど工夫する必要性があった。
- ・卒業後を考慮したことと本人の意識変容を狙ったため家庭とのつながりを持たなかったが、家庭との連携が必須であると感じた。今後の指導には家庭との連携を考慮した指導内容にするべきであると考えられる。
- ・生徒の本研究へ取り組む意欲を持続させられるような働きかけが継続的に行えなかった。意欲が減退している時に向上できるような働きかけを行うことが今後の課題である。

【参考・引用文献】厚生労働省HP 肥満の定義、日本小児内分泌学会 小児肥満、令和元年度学校保健統計調査結果（秋田県分）
福島県肥満指導資料、令和元年度秋田市養護教諭研究会研修会「高等部」研修資料

【評価】 4:とてもそう思う 3:そう思う 2:そう思わない 1:全くそう思わない ※()内は回答者数 表①

	No	質問項目	回答
意識 の 変 化	1	正しい生活習慣について関心が芽生えた	4(2)、3(1)
	2	体重の変化に関心が芽生えた	4(3)
	3	食事内容や食べる順番について変化が芽生えた	4(2)、3(1)
	4	捕食の内容について関心が芽生えた	4(2)、3(1)
	5	体を動かすことが必要と思うようになった	4(2)、3(1)
行 動 の 変 化	6	生活習慣に変化があった	4(1)、3(1)、2(1)
	7	体重をこまめに測るようになった	4(1)、3(2)
	8	食事の栄養バランスや食べ順について気を配るようになった	4(2)、3(1)
	9	食事の量や内容を調整するようになった	3(2)、2(1)
	10	捕食の内容や量について調整するようになった	4(1名)、2(1名)
	11	運動をする機会が増えた	3(2)、2(1)
心 身 の 変 化	12	心理面で変化があった	3(2)、2(1)
	13	体重に変化があった	3(3)

【自由記述】

- ・実施したことで、自然と食事のバランスや運動を気にしていたように思います。忙しい時も暇を見つけて歩いたり間食の内容をカロリーの低いものにしてみたり、いろいろ考える習慣ができました。
- ・単純に先生と話すことが楽しかったです。気さくに声をかけてくださりありがとうございました、これからもできることから頑張りたいです。

II 授業改善推進プロジェクト

・前期校内研究授業

(1) 令和2年度の取り組み

令和2年度前期校内研修実施要項

新屋高等学校企画研修部

1 授業研究テーマ

「探究力」を育てる授業の工夫
－「対話」ではぐくむ5つの力－
〔知力・学力、課題発見力、課題解決力、受信力・発信力、自己実現力〕

2 目的

本校生徒自身の「探究力」の育成を目指し、カリキュラムマネジメントに基づいた授業実践を行う。また、授業研究を通して「探究」で身に付けさせたい資質・能力について考察する。特に、前期校内研修会では「課題解決力」に重点をおいた授業展開についての考察を深める。

3 実施日時 7月15日(水) 授業参観 14:25～15:15
授業研修会 15:40～16:40
〔会議室〕

4 次第

(1) 授業参観 6校時授業担当者以外授業参観

※指導案等は不要。

(2) 授業研修会 15:40～16:40

研修対象授業・担当者

科目	クラス	担当者	単元
古典	1A	佐藤 緑	漢文入門
日本史B	2C 2D	神居 正暢	国風文化の成立
数学B	3B	石塚 道康	数列
生物基礎	1D	阿部 大輔	呼吸
保健	2B	小森 美希	結婚生活と健康

①授業担当者から〔25分〕

授業黒板の写真をもとに授業展開について説明をする。

②協議〔25分〕

授業についてグループに分かれて意見交流を行い、その内容を全体共有する。

※シート記入・・・授業担当者に意見・感想をフィードバックするため。

③まとめ〔10分〕 教頭先生から

校長先生から

令和2年度前期校内授業研修会記録

令和2年7月15日（水）15：40～16：40

（会議室）

研修対象授業・担当者

科 目	ク ラ ス	担 当 者	単 元
古 典	1 A	佐藤 緑	漢 文 入 門
日 本 史 B	2 C 2 D	神居 正暢	国風文化の成立
数 学 B	3 B	石塚 道康	数 列
生 物 基 礎	1 D	阿部 大輔	呼 吸
保 健	2 B	小森 美希	結 婚 生 活 と 健 康

①授業担当者から

（古典・佐藤緑先生）これまで漢文の基礎を学習してきたので「漢文の構造を理解する」ということを目標に授業を行った。

（日本史B・神居先生）「国風文化が現在の生活や文化にどのように影響しているのかについて学ぶ」ことを目標にした。復習事項を活用しながら事象を述べることができるようにさせたいと考えた。

（数学B・石塚先生）「等差中項、立式」を取り上げた。「どうすれば計算が進むのか、話し合いを通して式変形し、値を求めることができる」ことを目標にした。

（生物基礎・阿部大輔先生）「好気呼吸のメカニズムを理解し、エネルギー補給するために有効な食品の特徴を説明できるようにしよう」ということを目標にした。呼吸のメカニズムをジグソー法で取り上げてアウトプットを多くしようと考え、授業を計画した。

（保健・小森先生）結婚生活と健康については、昨年度の2月2日に授業を行った。今回は「グループ学習で発想を豊かにし、晩婚化や未婚化などの課題の原因と解決について考える」ことを目標にした。

②協議……以下の研修テーマについて2つ選択、具体的に振り返り→発表

- ① 〈板書〉の「課題解決」課程の見える化について
- ② 〈対話〉の授業における機能等について
- ③ 〈資質・能力〉〈思考力〉の育成について

A班 ①について

授業の前提として、その時間の流れを提示しておくことが必要だ。途

中経過を板書すれば、進行をスムーズにする効果も生まれる。ただ、グループ活動のまとめや過程の見える化は難しい。時間も足りない。デジタル化できるといい。

②について

対話を通して人の意見を聞くことにより新たな気づきがある。その中から疑問が生まれ、深い学びに入る。グループ学習では、役割分担をして効率よく対話に参加できるようにすることが必要である。

B 班 ①について

問題解決のための細かな考え方を生徒に板書・説明させていた点が過程の見える化といえる。必要な公式を紙にして作り提示したことで、適切なヒントとなり、生徒にとって方向性がわかるものとなっていた。

③について

生徒のつぶやきを拾うことで、みんなで思考のブロックを積み上げ、思考を共有できていた。ヒントを適切なタイミングで行っていた。

C 班 ①について

1時間の流れが板書でわかる。ゴールが見える授業だった(生物基礎)。グループの話し合いが共有しやすい授業だった(保健体育)。グループでまとめたこと(個人のプリント)を板書させるのは取り入れやすいので、参考になった(古典)。課題設定がよい。やる気を出させやすい授業だった(数学B)。

②について

答えを導き出そうと努力している姿勢が見られたし、対話でアイデアが出せるところは良い。時間配分や、課題の難易度をどうするかが重要である。時間で区切る方がテンポ良くスピーディに進められる。課題・目標は絞って、深みを持たせる方が良い。対話にはルールも必要である(必ず1回は話す等)。

D 班 ①について

板書の見える化のためには、提示の仕方が重要になってくる。目標・過程・結論がしっかり示されているか等、見てすぐに流れがわかるものでなくてはならない。

③について

グループ学習では、グループによって取り組み方に格差が生じる。どこに合わせるかが難しい。グループ内でもやる人とやらない人が出てくる。グループ毎での評価が難しい。最初のグループ設定が大事で、グループ分けには規準が必要である。

E 班 ②について

普通の授業での対話を通して、学習への理解を深め、疑問点を解決する力を育てることができる。また、コミュニケーション能力も高めるこ

とができる。聞くことに恥ずかしさを感じない雰囲気を作るのは大切であり、教育に必要な力を伸ばすことにもつながる。

③について

ただ穴埋めする等ではなく、自分の言葉で考えをまとめ、文章化することで思考が深まる。課題解決力と言っても、教科によって様々な過程がある。それぞれの特質に合わせた課題の解決の仕方を模索していくことが必要である。必ず振り返りをするすることで、理解力や思考力が深まる。小道具の工夫も効果がある。

F 班 ②について

情報の共有・交換をすることで気づきが生まれる。特に発表者には、知識の定着という点で効果がある。ただし、興味の無い生徒をどうするかが問題で、対話に入る前の準備が重要である。

③について

生徒に考えさせるためにも必要以上に教えないことや、その時考えることは何かを生徒にしっかり提示することが必要である。言語能力を高めることが大切である。

③まとめ

熊谷禎子 教頭先生から

我々は、常に授業のブラッシュアップを図っていくことが求められている。また、教科の特性に応じた課題解決力が必要である。目標設定については、「課題解決力」の場合、例えば「～ができるようになる」が適切である。「好気呼吸のメカニズムを理解し、エネルギー補給するために有効な食品の特徴を説明できるようにしよう」は、文章化や言語化の手立てとして「説明できる」ことが明示されていてわかりやすい。「漢文の構造を確認する」、「～を求めよ」等は、具体的に何ができるようになればよいかかわりにくく、不適切である。さらに、対話では、グループ内にまとめる生徒がいるのかどうかを配慮することも大切である。

根 義鎮 校長先生から

授業担当者は、忙しい中で話題提供者として、よくやってくれた。「課題解決力」をテーマに行った今回の研修会の協議では、先生方によってテーマに向けた話し合いが積極的に展開されていて良かった。課題解決のメリットとして、①思考力向上、②解決策を見いだす、③自分の考えを論理的に説明することが挙げられる。また、問題解決力が高いということは、①日常生活で疑問を持つ、②失敗しても修正できる、③P→D→C→Aサイクルが早い、ということである。課題解決をして思考力を高めていくことは、生きていく上で必要となる力である。生徒を社会人になってから課題を解決できる人間に育てていくことが求められている。

・後期校内研修 教育講演会（令和2年度）

日 時 令和2年11月18日（水）15：40～16：40

テーマ 「探求活動について考える」

講 師 秋田公立美術大学 教授 藤 浩志 先生

【1】根 義鎮 校長先生から

（講師紹介）藤 浩志 先生は、京都市立芸術大学美術学部工芸コース染織専攻、京都市立芸術大学大学院美術研究科を卒業し、アートプロジェクト、地域参画、空間造形を研究分野としている。2014年からは秋田公立美術大学美術学部美術学科教授、2018年からはNPO法人アーツセンター秋田理事長を務めており、多彩な活動をしている。

【2】藤 浩志 先生から

今年にはコロナ禍で個人と集団との関わりが気になる。美術、地域の中でどうやってイベントを作っていくか、非常に難しい状況になっている。自分の専門はアートプロジェクトで、社会の問題を捉え、これから新しい価値になりえるアートなイベントを作っている。美術大学は、今までにない価値を作り出す研究をする場所であり、どのようにして今までにない価値を創造していくかが課題である。探究活動はその時々を中心となる興味・関心と深く繋がっていて、人生とともに変化していくものである。興味・関心は、個人の感性からと法人や団体の立場、法律やルールからとでは見る角度が違う。個人に対して、都市は法人・企業の集まりである。個人が問題を掘り下げようとする、自分が団体に対してどう関わっていくかという点で、立場や集団・団体とぶつかる。自分は不完全で、未熟、不安定な存在であると自覚することが必要であり、自分をどうやって作っていくのかを考えることは、探求と深く関わる活動である。

人は99%の無意識とほんの少しの意識で動いている。そのため無意識から意識に変わるのは難しく、無意識で何をやったのか見直していくべきだ。人は何かを作る時や意識化する時、過去の模倣しか出来ない。人の周りにはいろいろなステークホルダー（社会、法人、利害関係者）がある。未来をつくるため様々なステークホルダーとどのように関わるのかということは、どう存在するかということである。また、様々な体験をして無意識だったものが意識化されていくことは、いかに変化していくのかということでもある。高校生が体験によって変化し続けるということを実感して、自分をつくる上でどのステークホルダーに手を伸ばし、繋がろうとするのが重要である。過去は痕跡や記録、記憶などを観察したり調べたりすることができる。未来は見えないが、過去から予想することは出来る。人は過去を作ることが出来るので、過去や今を作るとは、未来の過去を作ることになる。つまり、過去を作るとはまだ知らない自分を作ることだといえるし、感性が必要になるのである。

人生のサイクルは30年前後で切り替わる。デザイナーは20代後半くらいまでが寿命で、この時期に誰と出会うか、いかに興味・関心が制限されないかで差が出る。10～20代に出会ったことが遺伝子に影響を与え、未来を変えることに繋がる。また、「何かが違う」という言葉にならない疑問や違和感に向き合うことが大切である。表現・研究の方法は、①状況を観察する ②方向性を決める（フィールドワーク、文献調査、インタビュー、ヒヤリング、ディスカッション、フィールドノートなどを通して、言語化、図形化、痕跡を蓄積し、思考・認識のプロセスを視覚化し、参考にしながら考える） ③新しい仮説を導き出す という流れで行うものだ。いろいろな活動をして自分の特性を探していくことが、探求であるといえる。その際どうやって物事を捉えるかが問題だが、グループワークにおける役割、人間と人間の間にも共通項があるものだ。要素を因数分解し、共通項となる最大公約数や最小公倍数等を見つけ、新たに掛け合わせることで新しいものを導き出すことが出来る。例えば、新しい価値を作る生態系は「光・風・水・種・土」に分類される。人にはそれぞれの役割があり、何かをやるためにはいろいろな人が必要である。

人は探求するために生まれたともいえる。探求できる喜びや自由は束縛されない。社会との関わり方が分からない学生が多いが、どう生きていくのかが問われている。

【3】質疑・応答

（阿部 大輔 先生）

本校は地域をテーマに探究していて、これはコミュニティーを作っていくことでもあると思う。コミュニティーデザインの分野で大切にすることは何か。

（藤 浩志 先生）

性質の違うもの同士がいかに活動を発生させるか、自分がいかに作らないか、が大切である。さらにどのコミュニティーとやるか、全体を見渡して繋がりを作っていくことが必要である。新しい活動は、住民の人間関係をよく見極めることが重要だ。集団の形成の過程は次のパターンが多い。① 立場や個々で集まる人、新しい人が入った時に集まる人 ②第2集団ともいべき地域で活動している人 ③地域を動かす人 である。コミュニティー作りは難しいが、ディスカッション、グルーピングをして紹介していくと良い。事業評価は、金銭面や入場者数ではなく、ドキュメンテーションの力で行う。高校生がやったこと（ドキュメント）が過去を作っていくので、記録し、評価をテキスト化していく。活動の編集、記録、蓄積が探究活動の価値を作っていくことに繋がる。

【4】根 義鎮 校長先生から

「人生は探求である」、「未来は見えない、作れないものであるけれども、過去を見て予想はできる」という言葉が印象に残った。生徒たちに指導する上で、「状況観察」「方向性を決めるが結果は決めない」ということを参考にしていきたい。

令和2年度

探究活動等実践モデル校公開授業研究会(秋田県立新屋高等学校)要項

- 1 テーマ カリキュラムマネジメントと総合的な探究の時間
－対話で育む5つの力－
- 2 期 日 12月15日(火)
- 3 日 程 12:40～13:00 受付
13:00～13:20 全体説明
13:35～14:25 研究授業
14:40～15:50 研究協議会
研究協議題:「探究」で伸ばす資質・能力について

て

- 4 会 場 秋田県立新屋高等学校 010-1651 秋田市豊岩石田坂字鎌塚77番地3
- 5 内 容

(1) 研究授業

教 科	科 目	授 業 者
地 歴	日本史B	神居 正暢
理 科	生物基礎	阿部 大輔
保健体育	保 健	小森 美希

(2) 展示 2学年総合的探究の発表ポスター

6 申込み

(1) 申し込み方法

研究授業・研究協議会への参加を希望する方は、右側QRコードを読み取り、専用フォームからお申込みください。

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdkyuoeECMu_sza9ShyXnetltfvyJM7P-eoaZg_7tSnYNGE7Q/viewform



(2) 申し込み期日 12月4日(金)

※新型コロナウイルス感染症対策のため、参加者は検温と体調管理をお願いします。

また、マスクの着用など咳エチケットに十分留意してください。

※授業参観、研究協議会は密を避け、間隔を空けて換気などに配慮しながら行います。

※今後の新型コロナウイルス感染症の状況変化に伴い、日程等に変更が生じる場合もありますので御了承下さい。

1. 単元・題材名

教科書 高校日本史B 新訂版（実教出版） P 9 4～P 9 5
 第2編 中世 第4章 中世社会の展開 「9 東山文化と地方への普及」

2. 生徒観及び指導観

全体として真面目な雰囲気のある文系のクラスで、およそ半分の生徒が四年制大学への進学を希望している。日本史についての興味関心は低くはないが、自ら問いを發することへの苦手意識がある。授業では、日本史の基本的な知識の定着とともに、遺物から当時の生活を想起させたり、現代との関わりを考察することで、日本史を学ぶことの意義や興味・関心を高めてきた。

本時では、近代以降の和風住宅の出発点となる書院造について、現代とのかかわりに着目しながらその変化を読み取り、個々の気づきとグループ協議をとおして、その特徴についてまとめる。

3. 評価の観点

①関心・意欲・態度	②思考・判断・表現	③技 能	④知識・理解
・中世国家と社会や、文化の特色に対する関心と問題意識を高めている。	・中世国家の形成過程や社会の仕組み、文化の特色とその成立の背景から課題を見だし、明を中心とする国際関係について多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	・中世国家と社会や文化の特色に関する諸資料を収集し、有用な情報を適切に活用している。	・中世国家の形成過程や社会の仕組み、文化の特色とその成立の背景についての基本的な事柄を、明を中心とする国際関係と関連付けて理解している。

4. 単元・題材の指導計画

時間	学習活動及び育む力	育成する資質・能力〈評価基準〉
1 2 3	建武の新政から室町幕府の確立までの過程についての基本事項を身に付け、東アジアの動向とも関連づけて理解する。 【知力・学力】	建武の新政から室町幕府の政治機構の確立および、明を中心とする東アジアの国際関係について、大まかな流れを理解している。また、鎌倉幕府との比較から中世国家の変化を整理している。 【A】
4	室町時代前半の文化について、歴史的な背景を踏まえながら多角的にとらえ、現代の文化に与えた影響について考察する。 【課題発見力】	武家文化と公家文化の融合、臨済僧を中心とする新たな大陸文化の摂取が、文芸・絵画・建築・能など様々な方面に影響を与え、現代の文化とのかかわりという視点を持っている。 【B】
5 6 7 8	室町幕府の展開から戦国時代にいたる過程についての基本事項を身に付けるとともに、産業の発展や貨幣経済の拡大と庶民の台頭について関連づける。 【知力・学力】	農業をはじめとする諸産業の発展が商品の流通を促進し、貨幣経済が拡大したことを理解している。また、惣村と一揆に見られる庶民の台頭と、内乱による幕府の動揺と戦国大名の出現について、相互の因果関係を整理している。 【A】
9	室町時代後半の文化について、歴史的な背景を踏まえ多角的にとらえ、現代に与えた影響について考察する。	茶の湯や生花など、日本固有の文化の基礎が確立したことを理解している。 【B】
【本時】 10	書院造と近代和風住宅を比較し、共通点や失われた点を取り上げ、現代とのかかわりをまとめ発表する。 【課題解決力】	現代とのかかわりに注目して、その変化を暮らしや生活様式の中に投影して考察している。 【B】

5. 本時の計画

	学習内容	学習活動及び育む力	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	○東山文化（概要） ○建築様式の変化	・既習事項について確認する。 ・プリントで建築様式の変化を確認する。		
展開 40分	<p>【本時の課題】 建築様式の変化が生じた理由を生活様式や環境、社会など様々な視点から考察し、説明できる。</p> <p>【発問】 和室をイメージして、書院造がどのような背景で生まれ、現代にどのような影響を残しているのか考えてみよう。</p>			
	1 寢殿造と書院造の比較	<p>・写真を照合して、気付いた内容を各自でプリントに記入する。</p> <p>意見交流をしながら、寢殿造と書院造の形式（総畳敷等）の変化とその背景を考察する。</p>	<p>・ポイントになる構造（壁、床、柱など）を指定し、着目させる。</p> <p>・変化（日明貿易、寒冷化、流通経済など）を既習事項から確認させる。</p>	建築様式の変化があらゆる生活や社会の変化について、考察し言及している。 【②】
	2 書院造と近代和風住宅の比較	<p>書院造と近代和風住宅を比較し、共通点や失われた点を取り上げ、現代とのかかわりをまとめ発表する。【課題解決力】</p>	<p>・現代とのかかわりに注目して、その変化を暮らしや生活様式の中に投影して考察させる。</p>	
<p>【期待する生徒の気付き】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・書院がテーブルになり、読み書きをする場から家族の団欒の場にもなった。 ・飾り棚が押入れになり、収納が増えたことから、大人数で生活している。 ・電灯が設置されたので部屋が広がった。 ・畳や襖、障子は現在も日本で使われている。 				
まとめ 5分	○まとめ	・書院造について、建築様式の変化を歴史的な背景を踏まえ整理し、その特徴を文章でまとめる。		

【評価の観点】 ①関心・意欲・態度 ②思考・判断・表現 ③技能 ④知識・理解

6. 単元・題材で育成する資質・能力〈評価規準〉

【A】知識・技能	【B】思考・判断・表現	【C】学びに向かう力、人間性
<ul style="list-style-type: none"> ・社会的事象等についてその因果関係を理解し、その知識を身に付けている。 ・社会的事象等を調べまとめる、技能を身に付けている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的な見方・考え方をを用いて、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察している。 ・考察したことや構想したことについて、説明したり議論している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習対象について主体的に調べ分かってしようとしている。 ・よりよい社会を考え学んだことを生かそうとしている。

1. 単元・題材名

教科書 改訂生物基礎（東京書籍） 第3編 生物の体内環境の維持 第2章 体内環境を維持するしくみ

2. 生徒観及び指導観

1年B組（男子18名、女子17名）は『学び合い』の授業をベースに「前に踏み出す力」や「チームで働く力」の養成に努めてきた。今後は、これまでの流れを継承しつつ、正解の見えにくい時代を生き抜くための「考え抜く力」を生物の学びの中で育みたいと考えている。そのためには常日頃から「問い」を持ち続けることが重要で、授業内でも「問い」づくりの機会を用意してきた。

本時は「コロナ禍において不眠者が増えている」ことを題材に、どのような原因で不眠者が増えているのかを自律神経と繋げて分析・考察し、自己実現力の養成を目指したい。

3. 評価の観点

①関心・意欲・態度	②思考・判断・表現	③観察・実験の技能	④知識・理解
体内環境の維持の仕組みについて関心をもち、意欲的に探究しようとしている。	体内環境が自律神経系と内分泌系の作用により調節されている仕組みを考察し、導き出した考えを表現している。	体内環境の維持の仕組みについて観察・実験を行い、基本操作を習得するとともに、それらの過程や結果を的確に記録、整理している。	体内環境の維持に自律神経系と内分泌系が関わっていることを理解し、知識を身に付けている。

4. 単元・題材の指導計画

時間	学習活動 及び 育む力	育成する資質・能力<評価基準>
1 2	(1)神経系の分類と脳の働き 神経系を分類し、各神経の役割を確認する。また、ニワトリの脳の観察を通して、脳の位置や役割について整理する。 【知力・学力】	神経系を分類し、各神経の大まかな役割を理解している。また、中枢神経である脳の観察を通して、各脊椎動物の脳の特徴を整理している。 【A】
4 5 6 (本時)	(2)自律神経系による体内調節 自律神経の役割を確認し、資料を分析するワークや「問い」づくりワークを通して、日常生活と自律神経の繋がりを考察し、その内容を共有する。また、自律神経に関する新聞記事を分析し、「問い」づくりのポイントを整理する。 【自己実現力】【課題解決力】	自律神経（交感神経・副交感神経）の役割を把握し、自律神経と日常生活の関わりを根拠と共に表現しようとしている。また、ワークを通して、日常生活と自律神経を繋げて考察し、日々の生活に活かそうとしている。 【B、C】
7 8	(3)内分泌系による体内調節 内分泌系の役割を確認し、「問い」づくりワークや課題を通して、日常生活と内分泌系の関わりを考察し、内容を整理する。 【知力・学力】	内分泌系による役割を把握し、内分泌腺や分泌されるホルモンについて把握している。また、ワークを通して、日常生活におけるホルモンの役割について考察している。 【A】
9 10	(4)自律神経系と内分泌系による協働調節 自律神経系と内分泌系が血糖量や体液濃度、体温の調節にどのように関わっているか確認する。また、「問い」づくりを通して、恒常性が日常生活と大きく結びついていることを整理する。 【受信力・発信力】【課題解決力】	これまで学習してきた自律神経系と内分泌系によって恒常性が維持されているしくみを理解している。また、日常生活と恒常性を繋げて考察し、日々の生活に活かそうとしている。 【A、C】

1. 単元名・題材名

教科書 最新高等保健体育（大修館書店） 第3単元 社会生活と健康 7. 働く人の健康づくり

2. 生徒観及び指導観

真面目な生徒が多く、落ち着いた雰囲気です授業に取り組むクラスである。これまでのグループ学習を通して、全体的に活発な言語活動ができるようになってきている。本時では、高校生にとってあまり意識したことがない『働く人の健康づくり』が題材となる。『働く』ということイメージさせるきっかけとして、これまでの保健学習で得た知識を踏まえながら、働く人の健康の保持増進のための具体的な取組について、幅広い視点から考えさせたい。また、探究活動で培った「対話」と「協働的な学び」を活かして、現代人の実生活に必要とされる健康観にも気づかせたい。

3. 評価の観点

①関心・意欲・態度	②思考・判断	③知識・理解
働く人の健康の保持増進について、課題の解決に向けての話合いや意見交換などの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。	働く人の健康の保持増進について、学習したことを個人及び社会生活や事例と比較したり、分類したり、分析したりするなどしている。また、筋道を立ててそれらを説明している。	働く人の健康の保持増進について、理解したことを発言したり、記述したりしている。

4. 単元・題材の指導計画

時間	学習活動 及び 育む力	育成する資質・能力〈評価規準〉
1 2	6. 働くことと健康 ・産業構造、働き方の変化に伴い、健康面でどのような変化が現れるかを、資料をもとに整理する。 ・働き方と労働災害の変化についてまとめる。 ・労働者の健康保持や労働災害を防止するための方策についてまとめる。 【知力・学力】 【課題発見力】	労働による傷害や職業病などの労働災害は、作業形態や作業環境の変化に伴い、質や量に変化してきていることと労働災害を防止するための方策について、理解したことを発言したり、記述したりしている。【A】 労働災害について、課題を発見したり、解決の方法を整理したりしている。【B】
3 (本時) 4	7. 働く人の健康づくり ・働く人の健康の保持増進のための対策についてまとめる。 ・働く人の健康状態を把握するための対策や健康増進活動について整理する。 ・余暇の活用とワーク・ライフ・バランス、生活の質の向上と健康の保持増進についてまとめる。 【課題解決力】 【自己実現力】	働く人の健康の保持増進について、課題解決の方法を整理し、筋道を立ててそれらを説明している。【B】 適切な健康管理と安全管理の必要性について、理解したことを発言したり、記述したりしている。【A】 働く人の健康の保持増進について、話合いや意見交換などに主体的に取り組もうとしている。【C】

5. 本時の計画

過程	学習内容	学習活動及び育む力	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	○前時の振り返り	○前時の学習内容をペアで確認し合う。	○ペアワークで前回学習した内容を確認するよう指示し、学習内容の定着を図る。 ○本時の目標を提示する。	
展開 40分	<p>[本時の目標] 働く人の健康を保持増進するための手立てについて考え、根拠を示して説明できるようになるう！</p>			
	<p>発問 「具体的事例を基に、そこから考えられる健康問題について考えてみよう」</p>			
	○健康問題について身近なこととして考える。	○発問内容について考える。 個→グループ ○グループで意見交換した後に、自分の考えを再度まとめる。	○身近な働く人を題材とし、イメージしやすくする。 ○グループであがった健康課題を分類・整理する。 ○自分の考えに意見交換で得たことを活かす。	具体的事例を分析できているか (②) ・グループ活動 ・観察
	<p>発問 「健康の保持増進のために、どのようなことをしたら良いか考えてみよう」</p>			
	○健康の保持増進について考える。 ○環境改善と健康管理の重要性について理解する。	○これまでの保健学習で得た知識も活用して、さまざまな側面から考えられる取組について、グループで話し合う。 ○学習ワークシートにまとめる。 ○発表シートに整理する。 【課題解決力】	○共有する場のルールを提示する。(ルールシートを掲示) ○グループ内で分担してまとめる。 ○机間指導しながら、グループ間交流することを促す。 ○ワークシートをそのまま読み上げて発表するのではなく、根拠をふまえて自分の考えや感想等も含めて述べるよう指示する。 ○環境づくりだけでなく、働く人自らが積極的に健康の保持増進に取り組むことの必要性について気づかせる。	話し合ったことを基に、ワークシートに根拠を記載しているか。 (②) ・ワークシート ・観察
まとめ 5分	○学習内容の振り返りをする。 ○次時の予告	○授業評価シートに記入させる。	○本時の学習を振り返り、自分の変容を意識させる。 (分かっていたこと、新たに気づいたこと等)	

【評価の観点】①関心・意欲・態度 ②思考・判断 ③知識・理解

6. 単元・題材で育成する資質・能力〈評価規準〉

【A】知識・技能	【B】思考力・判断力・表現力等	【C】学びに向かう力、人間性
社会生活と健康について、社会生活における健康の保持増進に関する課題の解決に役立つ労働と健康に関する活動や対策についての基礎的な事項を理解している。また、個人及び社会生活における健康・安全について、課題解決に役立つ知識を身に付けている。	社会生活と健康について、個人及び社会生活における健康の保持増進に関わる課題を発見し、その解決を目指して、総合的に考え、判断し、それらを表現している。	健康を優先し、自他の健康の保持増進や回復及び健康な社会づくりに関する学習活動に主体的に取り組もうとしている。

5. 本時の計画

	学習内容	学習活動 及び 育む力	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの内容を確認し、本時の流れと目標を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの内容を確認する。 		
<p>[本時の目標] 自律神経と日常生活の繋がりを学習し、1人1人の日常生活に活用できるようになるう！</p>				
展開 40分	<p>[課題] コロナ禍において不眠で悩む人が増えている。不眠で悩む人々に質の高い「睡眠」を確保するにはどのようなアドバイスができるか、考察しよう！</p> <p>①日常生活と自律神経の繋がりを確認し、睡眠の5つの大切さについて整理する。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> (i)脳と体の休息 (ii)記憶の整理 (iii)ホルモンバランスの整理 (iv)免疫力上昇 (v)脳の老廃物の減少 </div> <p>②班毎に、不眠をもたらす原因をマトリクスシートに整理する。</p> <p>③班毎に、原因に基づいて質の高い「睡眠」を確保する方法を考察する。</p> <p>④各班で考察した内容を基に、不眠に悩む人にアドバイスするロールプレイングを行う。</p> <p>⑤自身の班に戻り、アイデアを共有し、新たな視点や気づき等を整理する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 自律神経（交感神経、副交感神経）の役割を整理し、睡眠の大切さを理解する。 マトリクスシートに不眠をもたらす原因を列挙する。 原因に基づき、質の高い「睡眠」を確保する方法を考察し、整理する。 アイデアを共有しながらロールプレイングを行い、不眠で悩む人にアドバイスする。 <p style="text-align: center;">【自己実現力】</p> <ul style="list-style-type: none"> 他の班のアイデアなどを共有し、新たな視点や気づき等をマトリクスシートに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> 睡眠の大切さを紹介する。 コロナ禍ということを強調しながら、様々なシチュエーションを話題提供する。 異なる班員とロールプレイングできるように調整する。 新たな視点や気づきは異なる色のペンで記入するよう促す。 	<p>「睡眠の質」を向上させる手法を自律神経の働きを基に表現しているか。②</p>
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> 本時の内容を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りシートに記入し、自己評価を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りを行うための時間を確保する。 	

【評価の観点】①関心・意欲・態度 ②思考・判断・表現 ③観察・実験の技能 ④知識・理解

6. 単元・題材で育成する資質・能力<評価規準>

【A】知識・技能	【B】思考・判断・表現	【C】学びに向かう力、人間性
<ul style="list-style-type: none"> 自然の事物・現象に対する概念や原理・法則を理解し、知識を身に付けている。 観察、実験などを行い、基本操作を習得するとともに、それらの課程や結果を的確に記録、整理し、自然の事物・現象を科学的に探究する技能を身に付けている。 	<ul style="list-style-type: none"> 自然の事物・現象の中に見通しをもって課題や仮説を設定し、観察、実験などを行い、得られた結果を分析して解釈し、根拠を基に導き出された考えを表現している。 	<ul style="list-style-type: none"> 自然の事物・現象に主体的にかかわり、それらを科学的に探究しようとするとともに、探究の過程などを通して獲得した知識・技能や思考力・判断力・表現力を日常生活や社会に生かそうとしている。

・協議記録

第1分科会（日本史B）

＜授業者より（神居）＞

教科のグランドデザインに明記されている目標にそって授業を組み立てた。「寝殿造」と「書院造」の変化の背景について生徒たちが自分なりの意見をもたせることができた。しかし、まとめが中途半端に終わってしまったことが残念だった。

＜参加者からの意見＞

中央高校 櫻田 博憲

最初の発問から、非常に流れの明確な授業であった。最後のまとめがどのようなものになるのか気になった。現代にどのような影響があったのか？書院造からの変化をまとめたいのか、背景に気付かせたかったのか、先生がねらったまとめは何であったのか知りたかった。細かい点では資料解釈の到達ポイントがわからず生徒が迷っていたので、しっかり示した方がよかった。対話を重視しているのが伝わる授業であったが、生徒による温度差があり、生徒の対話への参加度を振り返らせたりするなどの自己評価を毎時間行い、変容を測ってみてもよいのではないだろうか。

秋田工業高校 佐藤 かおる

学習形態が明確で、学習プリントや資料などが見やすく、ホワイトボードやふせんが適切に使用されているのがよかった。個人からグループ、グループから全体への流れがスムーズであった。ステップ2のテーマにある書院造と現代の関わり、どんな影響があったのかという設定に無理があるのではないか。寝殿造と書院造の比較は10分で展開し、書院造と現代の比較がメインになっていたが、時代的に間隔が開きすぎており、どういう答えを導き出したいのかわからなかった。50分の学習でどんな気づきがあるのか、歴史の流れの中で考えさせる方が自然である。寝殿造から書院造の比較を深めた方が歴史的背景を理解させるには適切でないか。

神居

書院造と現代との比較に無理があるのはわかっていたが、和風や和室の源流を実感させたかった。

西仙北高校 齊藤 真一

探究活動において地歴公民の授業のイメージができてなかったのよい機会となった。生徒の動きがよく、隣どうしやグループでの共同的思考力が育成されている。しかし全体への発問に対する反応が薄く、批判力や想像力を伸ばし、アウトプットしていく力を伸ばしていく必要があるのではないか。グループごとのふせんが貼られたホワイトボードを生徒が見て回る場面で生徒が見やすいようにボードの向きを変えた行為から対社会への意識を見て取れた。活動を通じて社会への視点を身に付けており、探究の活動として成り立っていた。

<助言> 秋田県総合教育センター 指導主事 加藤 昌宏

生徒への声のかけ方や活動の指示を急いでいたので丁寧に行うことでもっと活動がスムーズになるのではないか。寝殿造と書院造の比較から変化の背景を読み取ることと書院造と明治以降の和風住宅の比較から現代の生活の関わりを考えるという二つの視点から考察させる授業であった。身近な問題と絡めて考察させることや他との関連を意識させようとすることは授業の方向性としては今後も続けて欲しい。しかし適切な課題の設定か、課題を達成できたか検討が必要である。室町時代との比較の中で電気の有無を答えた生徒がいたが、ねらいを達成するためにどうすればよいのか考えて欲しい。授業のねらいは課題を達成した生徒の姿を明確化するものである。ゴールを定めてグループ活動や発問も含めて適切であったか。どのような力を身に付けさせたいのか？何をできるようにしたいのか？教科本来のねらいを忘れてはいけない。また、発問はわかりやすく一度生徒が聞いたら理解できる問が望ましい。一時間の授業の流れを生徒に示してもよかったのではないか。ホワイトボードをどのように使うかをあらかじめ示すことで生徒の主体性が高まったのではないか。主体的な学びは教師の問や指示から生まれる。問や指示が明確でなければならない。言葉のひとつひとつを丁寧にして欲しい。生徒の自己評価や評価基準の明示をした方がよい。課題と生徒との関係性を解決することで自己のあり方・生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し解決する力が育成される。枠を超えた自由な発想や他の教育資源の活用によって現状への批判する力や想像力を身に付けさせることができる。そのためにはどんな仕掛けが必要なのか、社会との連携を図っていくことを考えて欲しい。

第2分科会（生物基礎）

<授業者より> （阿部大輔先生）

普段授業を行う上で意識していることが2点ある。1つ目は社会人基礎力である「前に踏み出す力」「チームで働く力」「考え抜く力」の3つを意識しての授業展開である。この社会人基礎力と新屋高校で身につけさせたい5つの資質・能力を繋げることを意識して授業を行っている。2つ目は、変化の激しい社会だからこそ自分自身で様々な問いを立ててその問いに向かって考え抜く姿勢を養うことである。

来年度から一人一台タブレットが支給され、ICTや個別作業が加速していく。そのような中で人が集まる授業をどのようにすればよいのか、やはり大切なのは対話と協働を通して新しいものを発見していくことだと考え、今回の授業を組み立てた。

本時は、特に睡眠に焦点を当てて授業を組み立てた。マトリクスシートを用いて班で原因・対応方法を考え、ロールプレイングを通して自分事化できるよう仕掛けたが、班によって質の程度があった。より質を高めるにはどうすればよいのかアドバイスをいただきたい

<参加者より>

（男鹿海洋：福司先生）

生徒のバックグラウンドがどんな状態にあるのか探りながら拝見した。ホルモンや免疫の話が授業の中で出てきていたが、次時の導入として考える一つのきっかけとなっていた。

（阿部先生）

アドバイスをするためにはより理解したうえで進めなければならないので、要求していることは高いと思うが、指導者あるいは伝えるという立場になるということを考慮し、ステップを上げてアドバイザーとしてやってみようと思った。普段からある程度取り組んでいることなので、それほど苦労はなかったように思う。

（男鹿海洋：福司先生）

いろいろなことを自分で発見するきっかけになっていた。自分の中で疑問に思いながら話していたことも、あっと気づくタイミングがいずれ次の時間以降おとずれるのではないか。面白いメスの入れ方だ。

（秋田西：三浦先生）

日常生活との繋がりを強く意識させる授業になっていた。また保健体育等の授業とも連動できる内容であると感じた。最後のロールプレイング

で、本時の目標である自律神経の部分を意識してまとめている生徒があまり見られなかったが、次時ですらに本質に迫っていくことになるのか。

(由利：脇坂先生)

日常生活に大切なことという視点を意識して授業を進めており、非常に分かりやすかった。教室でしかできないことが沢山あった。マトリクスシートは自分で想像し周りの人のことを考えてしっかり答えを出すということができており、ロールプレイングもしっかり取り組んでいた。グループ活動では途中グループを変えることによって全員が参加できるものになっていた。楽しいだけでなく受験に結びつくような前後の指導がしっかりなされている。本日の内容が生徒の思い出として残り、今後の学習の意欲につながるものになると感じた。緻密な授業計画で、最後のまとめに接続詞を入れる指定は小論文対策、国語力にも生かすことができる。様々な教科に関連する内容で大変参考になった。

(仁賀保：木元先生)

コロナと不眠という現在の社会に即した課題を取り上げ、生徒は社会との繋がりを意識でき実際に社会でどのように生かしていけるかという視点で授業に対して意欲をもって取り組める内容になっていた。生徒の作業の切り替えがスムーズにできていた。一つの作業にじっくり取り組みすぎて最後時間が足りなくなるグループが見受けられたが、最初に全体の見通しや時間配分を提示することで時間に合わせた取り組みができるのではないか。

(横手清陵：佐藤先生)

生徒が元気で、テンポの良い授業であった。普段の授業の中でも問いづくりやアウトプット等がなされているということを感じさせられた。睡眠の質という点について、生徒が考える睡眠の質が果たして自律神経というところまで結びつけられたか。

(阿部先生)

授業の中でもう少し副交感神経のフォローを入れられるとよかった。副交感神経と睡眠の質の関係について強調して授業を行いたい。

(湯沢：吉田先生)

導入の仕方に度肝を抜かれたが、生徒は慣れた様子で、普段から生徒の心をつかんで授業に気持ちを向けさせていると感じた。プリントと板書シートが一致しているので、生徒は集中して教師の話の聞くことができている。作業の切り替えがスムーズにできている。グループワ

ークやロールプレイングにも普段から取り組んでいる様子うかがえる。評価の観点である睡眠の質を向上させる手法を自律神経の働きを基に表現しているという点についてそこまで到達できていたか。

(湯沢：佐川先生) 次時はどのような内容を考えているか。

(阿部先生)

副交感神経のことを強調した上で、本時のプリントの内容を拡大し、問い作りの演習をしながら、睡眠と自律神経の繋がりについてさらに理解を深めさせたい。

(湯沢：佐川先生)

課題設定の重要性を常に感じているが、本時の課題設定の内容は適切で授業が盛り上がった。対話が活発に行われ、話し合い活動もスムーズに行われていた。クラスが安心していられる雰囲気作りがなされていた。

<指導・助言>

(秋田県教育庁高校教育課 指導主事：伊藤淳先生)

生徒の積極性や意欲が感じられ、普段からしっかりと鍛えられている様子うかがえる。グループの人数も適切で、お客さんになっている生徒がいなかった。共感的人間関係が築かれており安心して活動できるクラス経営ができています。

最後の振り返りの場面で、教師はどのような振り返りを期待していたのか、一時間の授業を通して生徒がどのように変容を生徒が自覚することを目指していたのかについて全体で共有する場面があると、生徒自身が自己の学びや学びの変容を自覚することに繋がる。そのためには教師側がゴールから逆算して授業を組み立てる工夫が大切である。

(秋田県教育庁高校教育課 主任指導主事 能美佳央先生)

テンポの良い授業で、教師の指示がわかりやすく作業がスムーズになされていた。生徒と教師の良好な関係がうかがえる。生徒が主体的に活動しており、ロールプレイングで全員の生徒に役割を与えているのがよかった。睡眠の効果5つについて教師が伝えてしまうのではなく、生徒への問いにすることで新しい学びにつながっていく。不眠の原因についての話し合いは、生徒の経験のみに基づいた内容にしかならず深まりが生まれない。例えば教師が生徒に問いかけて答えを吸い上げ、資料を準備して配付し新しい知識を与えるなどの工夫が必要である。表現力は高まったが、知識の深まりとしては課題が残る。本時の授業は授業改善を図るうえで参考になる授業であった。今後にも期待している

第3分科会（保健体育）

① 授業担当者から

（保健・小森美希先生）

体育科のグランドデザインを基に「対話で育てる5つの力」の実現を目指して授業をしている。本日の授業内容は、保健の内容だけでなく職業観を身につけることにも繋がるものだった。自分のこととして考えてもらいたいと思い、自分を例にすることで身近な人を題材にして、グループ活動での「対話と協働的な学び」を軸に計画した。2つのテーマをグループ学習でまとめさせたため、時間内で終わるために急いで進んでしまった。前半のテーマを共有する時間が取れなかったのが残念だ。予想以上に生徒は立派で、これだけやれるのだということを知った。今後も生徒の良さを生かしていきたい。先生方からアドバイスをいただくことが出来たら有り難い。

感想・意見

（金足農業高校・内藤慎平先生）

研究授業お疲れさまでした。段取り・準備の良さや日頃からの生徒とのコミュニケーションの良さが授業によく表れていて、生徒の思考体験を深めることに繋がっていた。生徒の発表が素晴らしかったので、お互いの意見を共有したり次の展開に繋げたりするなど、もっと生徒の意見を生かしても良かったのではないかな。時系列での分類が面白かった。自分自身が健康のために行動していかないといけない、という生徒へのメッセージがしっかりしていた。

（西目高校・佐々木啓先生）

見本になる授業で大変勉強になった。ありがとうございます。生徒との信頼関係、生徒の聞く姿勢が素晴らしい。付箋を用いてグルーピングし成果物を生かして内容を広げていったという点で、生徒にとって納得できる授業だった。生徒が、根拠を持って論理的に発表していて素晴らしかった。最後に学習内容をまとめたことで、授業の流れも良かった。

（秋田西・杉山喜幸先生）

良い授業だった。ありがとうございます。生徒とコミュニケーションが取れていて、信頼関係ができていると感じた。授業の準備や板書が素晴らしかった。身体面については、生徒の発表の中に前の項で習っていた事柄が生かされていて、復習にもなっていた。また、身体面だけでなく心理面にも触れたことで、横断的な内容になっていた。本時の目標が

はっきりしていて、「今できること」と「時間のかかること」に分けて考えていた点も良かった。

（新屋高校・佐藤博之先生）

本校の生徒は、声が小さい。発表する時に聞こえるように話させることが課題だ。もっと前もって大きな声で話すよう指導しておけば良かったのではないか。

（新屋高校・檜岡直志先生）

指導案を見て、内容的には2時間でやればしっかりできるくらいの量だと感じたので、1時間でやるには盛り沢山すぎたかもしれない。発表の時にうまく言葉に出来ない生徒がいたが、例えばスマートフォンで根拠を調べるとか、考える材料があれば言葉にして発表できたのではないか。

（新屋高校・小玉博文先生）

「根拠を持って」考えるように指導しているので、どう説明をするのか楽しみだった。根拠を挙げて発表していて、生徒の違う面を見ることが出来た。数学科としても参考になった。論理的に説明できる生徒を育てていきたい。

（新屋高校・前田真先生）

小森先生は「緊張する」と言っていたが、本番に強かった。教材の準備が素晴らしく、クオリティが高かった。グループ分けはどのようにしたのか。発表終了の拍手の後、コメントがあれば良かった。

（新屋高校・早坂薫先生）

お疲れさまでした。保健と家庭科は内容が近いので、参考になった。プライベートを材料にすることで生徒の興味・関心を引き、親近感が高まった。生徒はグループ活動になじんできていて、日頃からグループ活動を行ってきた成果が出ていた。グループ活動は一人一役で役割が割り当てられていて、効果的に行われていた。

（新屋高校・豊嶋亜紀子先生）

生徒がグループ内で話せたのをいろいろ見られたのが良かった。コミュニケーションが取れていた。

（新屋高校・村上美由紀先生）

発想が豊かだった。精神面・身体面・社会面を1つに絞って考えさせてから共有させることで、時間的な省力化を図り、効率的な授業の進め方になっていた。結婚生活や人生、勤労について健康やストレスなどいろいろな視点から考えられた。ヘルスプロモーションという考え方からも、

働き方改革に繋げて社会の支援が必要だと考えさせる内容だった。

（新屋高校・高崎雅恵先生）

身近な話題で、生徒の興味・関心を引いていた。一人一役でグループ活動していて、どうやって変容していくか興味を持って参観した。

② 指導・助言

（秋田県教育庁保健体育課 指導主事 山信田善宣先生）

準備の段階から見てきたが、説明や指示が明確で、黒板も良くまとめられており、ひと目見れば1時間の授業の流れがわかるものとなっていた。時間配分が適切で、焦点を絞って活動することで予定の内容を最後までやりきり、素晴らしかった。指導案については、具体的事例でどう生徒を引き込むかという点で工夫が見られた。グループ活動はプリントに従ってやっていけば良い形になっていて、全体の流れを見通して取り組むことが出来た。分類や役割もプリントに示されていれば、より授業の見通しを共有できたのではないか。ただ、そうした指示がプリントになかったことで、生徒の自由な発言を引き出すことが出来た面もある。生徒は、対話活動に慣れてきているようだ。批判的思考力・創造的思考力を育むため、発表後に他の班から批判的意見を出してもらうのはどうか。今回の単元は教科書では最後の部分に当たり、小学校3年生から高校2年生までの9年間の保健学習の総まとめになる。単元のまとめにとどらず、ヘルスプロモーションの観点から心身のリフレッシュや余暇活動の充実、クオリティオブライフなどを考え、生涯を通じて健康で安全な生活を送るためのものになれば良い。

全体協議会

< 指導・助言 > 高校教育課 主任指導主事 能美佳央先生

実践計画を進めるために、本校では学校および生徒の現状や実態、課題、地域から求められていることを把握したうえで身につけさせたい資質能力を明確にし、その実現に向けて教科ごとのグランドデザインを作成するとともに、授業等においても対話を通して育む5つの力を制定するなど、何のためにどのような生徒を育成するのかということを視覚化し、授業改善の視点を明確にして学校が一体となって研究を推進している。

(1) 資質能力と観点別学習状況評価について

新学習指導要領では、生徒の診断的評価である観点別学習状況評価をA, B, Cで記載し、その評価を踏まえた上で総合的な評価を5段階で記載することになっている。その際、各教科の目標である資質能力の3つの柱に対応するように、観点別学習状況評価も①知識・技能、②思考・判断・表現、③主体的に学習に取り組む態度の3つの観点に整理されなければならない。その点に関して本校は先行して取り組んでいる。3つの育む資質能力については各教科で協議し共有したうえで設定することが大切である。各教科のグランドデザインシートの「何ができるようになるか」、「何が身についたか」の内容は、3点・3項目になる。これは各教科の観点別評価のもとになるものであり、十分な吟味が必要である。主体的に学習に取り組む態度、意欲、主体性は目に見えにくい。深い学びに繋げるためには、生徒による自己評価や学習に向けての自己調整能力が重要である。そのために事前に自己評価の基準を確認したり、生徒と教師で評価の基準を共有したりするなど、PDCAサイクルをしっかりと機能させ検証を重ねてほしい。

(2) 総合的な探究の時間について

調べ学習に留まってしまっていないか。①「総合的な学習の時間」と②「総合的な探究の時間」の違いは、課題と生徒の関係性にある。①は課題を解決することで自己の生き方を考えていく学び、②は自己のあり方と生き方とを一体的で不可分な課題を自ら発見し解決していく学びである。すなわち、生徒自身が課題を設定しその課題は生徒個人の環境と切り離せないものが望ましいということである。自分にとって探究していく価値があるテーマを見出し、その価値を自覚できるような深みの

ある探究活動に繋げて行ってほしい。生徒は我々の予想を軽く超えてしまいう可能性を秘めている。教師側の指導の枠に収まるようなものを前提とせず自由な発想や課題設定を促して、場合によっては外部の教育資源を活用して取り組んで行ってほしい。総合的な探究の時間に限らず普段の授業においても、生徒にどのような力を身につけさせたいのか、そのためにどんな資格が必要かを意識して、授業改善に取り組んでほしい。

今後は地域社会と教育目標を共有すること、地域社会の資源の活用、社会との連携を深めていくことが重要になってくる。本校は新屋地区をベースとして地域と密接に関わりながら学べる基盤が備わっている。カリキュラムマネジメントに関して試行錯誤している学校が多い中、本校は実態を踏まえ課題洗い出し、グランドデザインをツールとして視点をそろえている取り組みは良い例であり、ひとつのロールモデルである。

次年度以降も探究活動の実践校として本校の特色にさらに磨きをかけ、新屋高校のカリキュラムマネジメントの実現を目指してほしい。

<校長より> 根 義鎮 校長

本日はありがとうございました。本日も指導いただいたことを念頭に、引き続き理解を深めて指導していきたい。指定校は大変だったが、学校全体で取り組むことができたのはよかった。自分から率先してやることはなかなか大変だが、それを補うために外部から刺激を加えることは大切である。今回のことを糧に、さらにより良い生徒を育成していきたい。

・資料：これまでの活動記録

R1 記録～様々な体験や活動から新たな学びを発見しました。



α 登校日

1年生:「秋田を知る」～秋田の抱える課題について5名の講師の方にお話を伺いました。



講座の感想より

- 農業への新しいイメージが生まれた
- 自分自身の活性化について考えていきたい
- 県外で得たものを秋田で表現するという考えが素敵だと思った
- 地域活性化のためには、優れた対策ではなく、1人1人が好きなことをし努力することが大切だとわかった



2年生:「地域で活動する」～地域の現状を分析する方法などを学びました。



3年生:「地域に貢献する」～進路希望別に必要とされるスキルを身に付けました。



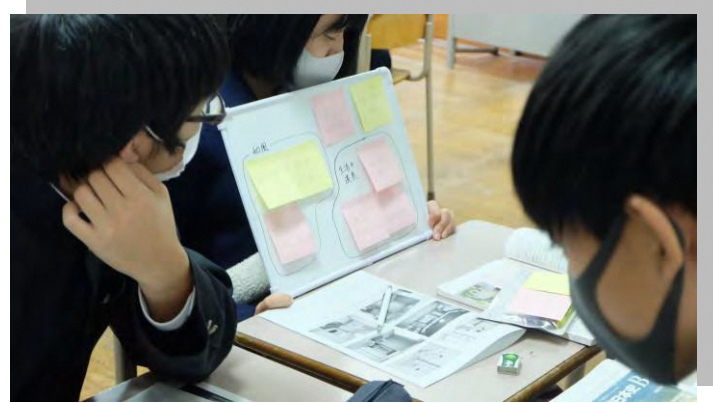
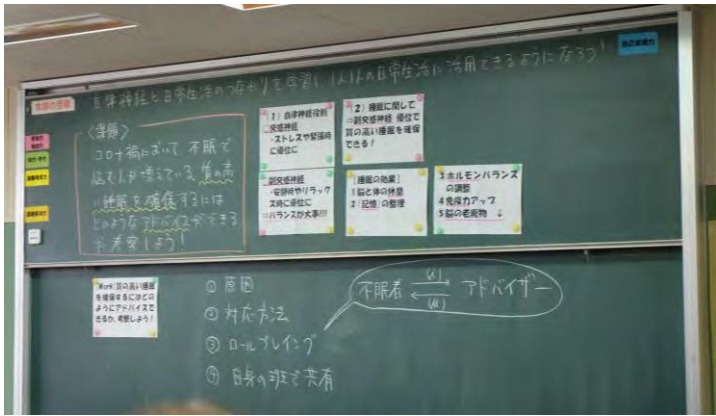
令和2年度 探究活動等実践モデル校
公開授業研究会

◆ポスター展示



◆公開授業





◆全体会



